伊勢日記私注㈥
—恋しき人—

松　原　輝　美

第　十　一　段

（子）　（人・・）（世に幸なき者なり
この帝に仕うまつりて・生みたりし皇子は、・・・・・・・・・・
けれは、うみたてまつりし君は八つにて・・・）　（る。）
・・・・・・・・・・・・五つといひし年亡せたまひにけれ
・（いみじく）（と思へど、かひなし・）・・・・・・・・・
ば、・・・悲しいみじとは世の常なり。嘆くものからかひなけ
・・（死なむ・・）（へど死なれねば・）　（泣きわた）・・
れば、世にあらじと思ふも心にかなわず、夜昼恋ふ・・るほどに、
・・（こにな）　（言へ・）（ける）
このみつと・つけたりし人のもとより・・。

（二五）　（も）
二六　思ふより言ふはおろかになりぬればたとへて言はむ言の葉ぞ
（し）
なき。
（と言へど、）　（なりにけり）
・・・・さらに物もおぼえねば、返りごともせず・・・・・。
（帰り来る）　（に・）　（ひとりかこ
またの・年の五月五日、ほととぎすの鳴くを聞きて、・・・・・
ちける）
・・・。
（二六）
二七　死出の山越えて来つらむほととぎす恋しき人の上語らなむ。

【通解】

（主人伊勢が）宇多の帝にお仕えするようになって、帝の御子をお

産みになった（ことは、以前にお話し申し上げましたが、）その産み奉った皇子は五つになったばかりの年に亡くなってしまわれたのでございます。（離れて住むことの多うございました皇子の死に、主人は）それはもう、たいそうお悲しみで、どんな言葉も主人のその悲しみを言い表す術とてございませんでした。

いくら嘆いても嘆きは尽きませず、（いっそのこと）この身を亡きものにと思うても死ぬこともかないませず、（ただ、幼い人を思うては）夜昼となく焦れ続けていらっしゃいました時、（以前に主人が）「見つ」と渾名をつけましたあの（平中様の）ところから（こんな慰めのお歌が参ったのでございます。）

心に思うているよりも、それを言葉にした時の方が、心がこもっていないように見えてしまいますものですから、私の今のこの心を喩えていう言葉とてもございません。

（平中様のお歌は、あの方の性格のそのままに誠意に溢れたお歌でございましたが、悲しみのために）ご自分を失なっておいでの主人には、それへのご返歌は到底かなわないのでございました。

（そのようにして、悲しみの年が暮れまして、）再び巡って来ました夏の五月五日、（折から）ほととぎすの鳴き渡るのを聞きまして、（主人は独りごたれるのでありました。）

死者の世界との間に在ると聞く死出の山を越えて来たであろうほととぎすよ。恋しい私のあの皇子が、今頃はあの世でどうしているのか、この私に語っておくれ。

【注解】

○この帝に仕うまつりて生みたりし皇子は、五つといひし年亡せたまひにければ、悲しいみじとは世の常なり。　こゝにその幼い死が語られてゆく皇子について、それが宇多の寵を受けた伊勢所生の皇子であることを疑う評者もいる。後述するように、『拾遺和歌集』巻二十、哀傷には、この皇子の死を傷む伊勢の歌とそれを弔問する平貞文との歌が並記されている。だがそれが、『伊勢集』に基づいて入集されたものであるやも知れぬとすると、これらの歌の存在をもって皇子実在の根拠とするには確かに弱い。がしかし、岡崎知子氏によって紹介された同じ『拾遺和歌集』の巻第九・雑歌下に入集されている次のような歌をみれば、伊勢が皇子を生んだということが、決して『伊勢集』の虚構とばかりは言えない気がする、と秋山氏は言っておられる。

その歌というのは、

伊勢の御息所生みたてまつりたりける皇子の亡くなりにけるが書き置きたりける絵を、藤壷より麗景殿の女御の方につかはしたりければ、この絵返すとて、　麗景殿の宮の君

542亡き人の形見と思ふにあやしきは絵みても袖の濡るるなりけり

というものである。「麗景殿の宮の君」は村上天皇の女御荘子女王（醍醐皇子代明親王の娘）、「藤壷」は同じ村上の女御安子（藤原師輔の娘）のことであるから、この話は当時から二代を経たほぼ半世紀の後のことになるが、伊勢の産んだ皇子の描き残した絵がその頃まで保存されていたのは、やはり伊勢の歌人としての盛名ゆえであろう、と岡崎氏は推量されている。

ところで、その実在がほぼ確実視される伊勢所生の皇子のその生涯ということになると、『伊勢集』冒頭の物語的部分の時間の進行の上から言えば、二・三類本の本文がそれを適正に描いているように稿者には思えるのである。その本文を三類本であげれば前掲の如く、

この帝に仕うまつりて子生みたりし人は、世に幸なき者なりければ、うみたてまつりし君は八つにて亡せたまひにける。

とある。第九段の「時の帝、召し使ひたまひけり」の条で述べた如く、伊勢の上に宇多の寵が及んだ時を寛平六年末から翌七年はじめにかけての頃とすれば、皇子の誕生は先ず寛平八年（八九六年）中のことゝなろうか。その上に、二・三類本が言う薨年の八歳を単純計算で加算すれば、その幼い死は延喜三年（九〇三年）のことゝなる。

延喜三年（九〇三年）という年は、宇多治世がその終わりをみた年である。即ちこの年は、第十段でみて来た通り、皇子誕生が推定される年の翌寛平九年（八九七年）には宇多が譲位し、次いで二年後の昌泰二年（八九九年）には宇多の落飾のことがあり、更に二年後の延喜元年（九〇一年）には道真配流と続いて、その宇多の盛時の終焉を告げるかの如く道真が築紫で憤死して行った年であり、同時に宇多が仁和寺に定住して仏道三昧に入った年でもある。ことばを贅して言えば、第十段末の温子と伊勢の、「昔おぼゆる円居」に涙するという贈答はその悲しみを共有する二人の女の、宇多治世の終焉に捧げられた挽歌と読めなくもない。それに続けて物語作者は本段に於いては、伊勢所生の宇多皇子の挽歌を歌い上げてゆくのである。

その皇子に関する確たる史料は現在残ってはいない。だが前述の如く、物語の時間進行の上で皇子の死を延喜三年（九〇三年）、年八歳とすれば、それより七年後の『日本紀略』延喜九年（九〇九年）正月二十七日の条に「無品行中親王 宇多皇子 薨 年十三。童稚也。」とある記事を、一年の誤差を許容すれば、この皇子に当てることが出来る。

伴信友の『表章伊勢日記附証』は、この行中歌王説を否定して、「さては此日記に八歳にて薨給へる由、さだかに記せるに合はず、ま

た『扶桑略記』裡書に同じ年月日にかけて、行中親王於仁和寺薨と記せるに、伊勢腹の皇子は、此日記にしるせる趣、桂宮におはしたりと聞こゆれば、これも合ひがたし。しかれば伊勢腹の皇子と行中親王とは、もとより別皇子にて、同年に誕れ給へるなり。思ふに二皇子同じ御ありさまにて、共に童稚て薨給へるからはやくより混らはしくきこえ給ひしなるべし」と言っている。これに対して、萩谷朴氏が行中親王説をとっておられるのは、秋山氏も言われるように、信友の反証をさして重い根拠とは見られなかったからであろう。実際、桂に皇子が住んでいたという『伊勢集』の記事も、皇子が全生涯にわたりそうであったということにはならないし、薨年齢についての疑義も、二・三類本と一類本とではその記述が異なっていて『伊勢集』の年齢表記は至って不安定だから、信友説もそれほど拠り所にはし難いといえるかも知れない。

一方、同じように行中親王説を否認しながらも、信友とはまた違った観点からこの皇子の生涯をみておられる、これも秋山氏の紹介されている、関根慶子氏や岡崎知子氏のお考えがある。すなわち関根氏は「伊勢程度の身分の婦人の所生の皇子女は御姓を賜わるのがこの頃の通例であるから、伊勢の皇子も、おそらく親王宣下のないまま短い一生を終えられたのであろう」と言われ、また皇子誕生を温子立后の後、すなわち宇多退位後と推定される岡崎氏は「御譲位後に出生し、はかばかしい後見者もない伊勢の幼い皇子が、果して親王宣下をうけたかどうか甚だ疑問であると思われる」と言われている。

稿者は、この皇子の生涯については、前述した如く、その時間の経緯に於いて、二・三類本特に三類本に依りたいのであるが、その皇子が誰であるかの詮索もさることながら、関根氏や岡崎氏の、特には関根氏の説かれる如く、その不運の境涯に於いてもまた、三類本本文の語るところに従いたいのである。つまり、伊勢がこの皇子を生んだことは、生まれた皇子の不運であったそのこと以上に、伊勢の不幸がそこにはあった。「この帝に仕うまつりて子生みたりし人は、世に幸なき者なりければ」という。それは、帝の御子を産み奉って最高の幸せ人となるべき運命を、その御子の死のために逃してしまった幸のなさを言うのではない。それは、前大和守という今は散位の一受領の娘として、はかばかしい後見もないままに至尊の寵を受けた伊勢の、「召人」としての不遇の境涯がそこにはあったということなのである。

○嘆くものからかひなければ、世にあらじと思ふも心にかなわず、夜昼恋ふるほどに、この条、三類本では、前条の終わりから続けて、

いみじく悲しと思へど、かひなし。

死なむと思へど、死なれねば、

夜昼泣きわたるに、

となっている。三類本本文の方が、一類本のやゝ冗漫な筆致よりも達

意である。片桐氏は更に「死なむと思へど、死なれねば」の部分について、この部分、底本では「しなむとおもふとしなれは」となっているが、本来は「しなむと思。しなれは。」と書かれていて、（『私家集大成』では「死なむと思へど、死なれねば」と「ね」を補って校訂している。稿者注）「思と」は「思（へ）ど」、「は」は「ず」の誤写であったと考えられるとして、こゝを「死なむと思へど、死なれず。」の完結した否定表現に校訂されている。

片桐氏の校訂に従うと、三類本では、この条は、前条の「・・・うみたてまつりし君は八つにて失せたまひにける。」の完結表現を受けて、いみじく悲しと思へど、甲斐なし。

死なむと思へど、死なれず。

夜昼泣きわたるに、

となって、いっそう端的、かつ達意の表現となる。稿者は前条で、本段は言葉を贅して言えば、伊勢所生の宇多皇子に捧げる挽歌を意図したものではなかったか、と言った。この否定表現で統括されて対となって叙述されてゆく傷心の漸層表現は既に、万葉以来の挽歌の表現として、伝統的にあったものではなかったのか。

因に、伊勢はこれより五年後の延喜七年（九〇七年）の温子の薨後、――時に温子36歳、伊勢は31歳から36歳位の秋のことであった――二十七句に及ぶ挽歌を詠むことになるのだが、その表現に少差を置きながら、次第に積み重ねてゆく傷心の漸層表現の中に彼女は温子に対する切々たる哀慕の情を吐露しているのである。或は、『伊勢集』冒頭の物語作者は、その伊勢自身の手になる挽歌のひそみにならってこの一段を構成しようとしたのでもあろうか。

なお、温子に捧げられた伊勢の挽歌は、『古今和歌集』巻第十九・雑体の中の長歌1006番に「七条のきさきうせたまひにける後によみける」と題して撰入されている。『伊勢集』の後続家集の中にも、一類本では「七条の后うせたまひて」として『古今集』とは三句に小異をもちながらも462番歌としてそのまゝにおさめられている。二類本では題詞はなく、冒頭の物語的部分に直接して、34番歌として三句の小異と二句の脱落を持って、三類本でも題詞はなく、しかし497番歌として、『古今集』と一句も違わない形でおさめられている。伊勢のこの長歌は、『古今集』の中には五首しか採られていない長歌の中の一首であり、伊勢以外の四首の作者はみな男性歌人の撰者のみである。この一事は、当時の歌壇に於いて男性歌人に伍する女流としての伊勢の力量を垣間見させるものである。

○このみつとつけたりし人のもとより、

二六（二五）思ふより言ふはおろかになりぬればたとへて言はむ言の葉ぞなき。

さらに物もおぼえねば、返りごともせず。またの年の五月五日、ほ

ととぎすの鳴くを聞きて、

三七(三六) 死出の山越えて来つらむほととぎす恋しき人の上語らなむ。

この条のはじめを三類本は、「このみこになつけたりし人」と作っているが、二類本も、こゝは「みつとつけたりし人」とあるので、三類本は目移りより来る誤写とみて一・二類本に従って置く。

ところで、「このみつとつけたりし人」は、第八段に、伊勢からの返書なきを愁いてせめて「見つ」とだけでもと哀訴して来た、その哀訴の言葉をそのまゝに伊勢はただ「見つ」と返した。それより相手の男を「この女『見つ』となむ名をばつけたりける」とあった例の「平中」こと、平貞文(定文とも)のことである。こゝにあるのは、その貞文の、皇子の夭逝に泣く伊勢を慰めた歌二六番歌と、それとは係わりなく詠まれた伊勢の独詠歌二七番歌とである。これらの歌が前述の通り、『拾遺和歌集』巻第二十・哀傷に並記されている伊勢と貞文の歌を典拠とするものなら、それらの『拾遺集』の歌の存在が、伊勢所生の宇多皇子の実在を証しするであろう。だがそれが逆に『拾遺集』の方が『伊勢集』に依拠したやも知れぬとなれば、この傍証も極めて確度の低いものとしなければならぬ。

稿者は、伊勢所生の皇子追尋の本段冒頭の条に於いてそう言って来たのであったが、その『拾遺和歌集』に並記されている伊勢と貞文の歌というのは次の通りである。

うみたてまつりたりけるみこのなくなりての又のとし、郭公をききて、　伊勢

1307 しでの山こえてきつらん郭公こひしき人のうへかたらなん。

伊勢がもとにこの事をとひにつかはすとて、平貞文

1308 思ふよりいふはおろかに成りぬればたとへていはん事のはぞなき。

見られる通り、『伊勢集』『拾遺集』ともに両者の歌は全く同じである。(三類本は貞文の歌の第五句に小異があるが、それとても歌意の上には何の異同も起らない。二類本は一類本、従って『拾遺集』に全く同じである。)歌は同じであるが、その載るところの順序は逆になっている。当然のように詞書も大きく違って来ている。『拾遺集』と『伊勢集』とどちらが先で、どちらが後なのか。どちらがどちらを典拠としたものなのか。片桐氏は、その前後関係については速断を保留されているが、これを虚心に読む限り、稿者は『拾遺和歌集』の方が先で『伊勢集』がこれに依拠して虚構を加えていると思う。

尤も、勅撰の三代集に入集している伊勢の歌のうち『伊勢集』冒頭の物語的部分と何らかの関係、恐らくはその典拠となっていると推定されるものが、『古今和歌集』では22首中5首である。これは1/4の確

率である。そして『後撰和歌集』では59首中7首、これは確率1/8であるのに対して、『拾遺和歌集』の場合は、その典拠となったと思われる歌は22首の中、ただ右の2首だけである。これも確率で言えば僅かに1/40に過ぎないことになる。それゆえ『拾遺集』の方を典拠とするのには、数量的にあまりに僅少のゆえに不安は残るのであるが、その歌の詠まれた状況に於いてこれをみるに『拾遺集』の方がより自然である。

ほととぎすは異称を「死出の田長」と言って、夏のはじめに死者の世界から山を越えてやって来る鳥だと信じられていた。それゆえに恋しいあの皇子があの世でどうしているか語って欲しいと言いかけているのであるが、この、皇子を失なっての悲傷を耐えての年余の中で、思わずに無心の鳥に向って絶唱する、その詠歌のありようは極めて自然である。

また、『古今和歌集』の238番歌や279番歌でみる通り宇多に近侍して来た貞文が、伊勢の不幸を知悉していたであろうことは容易に想像出来る。その貞文が、「心に思うているよりも、それを言葉にした時の方が、心がこもっていないように見えてしまいますものですから、私の今のこの心を喩えていう言葉とてもございません」と言って届けて来た彼のこの慰撫の言葉には、男の愚直なまでに誠実な弔意が溢れていて、これもまた時にあって極めて自然な詠歌のさまではある。

それに対して、『伊勢集』の方には、虚構があるというか、構成化が施されているというべきか。そこから、貞文の贈歌を受けて、「さらに物もおぼえねば、返りごともせず」とあるのに注して、

せっかく見舞をもらいながら、「さらにものもおぼえねば」（何ら感じるところもなかったので）返事もしなかったという

『伊勢集』の叙述はあまりにもひどい。やや滑稽な色好みであるという平中像ができあがってから、そんな平中をまったく問題にしなかったことを示すために書かれているというほかはない。「伊勢の御息所」と呼ばれるにふさわしい生き方を描くというこの『伊勢集』の書き方を示す好例といえよう。従って、事実とは見難いのである。

という、その構成化を深読みし過ぎた解釈も生まれて来るのである。こゝには、物語の文脈に沿うての構成化が行なわれている。「従って、事実とは見難い」のはまさにその通りではあるが、右の解釈は、作者が、その物語の文脈に沿うての構成化に於いて意図したものを、大きく読み誤ってはいないだろうか。

秋山氏も、貞文の弔問に対して伊勢が対応する「さらに云々」の条について、

さきに「返りごともせざりければ・・・」「返りごともなし。」

と、高飛車に平中を拒絶した（これについては、「第八段」に於

いて既述。稿者注）ように、ここでもやはりつれなく心を閉ざしている。しかも今は求愛ではなく、伊勢の悲しみを思って寄せた哀傷の歌に対してである。

と注しておられる。伊勢の対応を「ここでもやはりつれなく心を閉ざしている」と断言されるとやはり、作者の意図を読み違えておられるのではないか、と思われるのである。

尤も、周到な氏は直ぐに続けて、この伊勢の対応の表現、つまり作者による虚構或は構成化の意図を、「伊勢にとっては平中の弔問がいかに誠意のこもるものであろうと、それを受けつけるにはあまりに深くはげしい悲傷であったことを印象づけるためのものであろう」と、的確に注しておられる。

（姫君たちは）心にかけて、（父八宮の御容態）いかにとは絶えず思ひ聞え給へれど、（訃報を）打聞き給ふには、あさましく物覚えぬ心地して（惘然として、前後不覚の態で）いとど、斯かる事には涙もいづちかいにけむ、（泣くにも泣けず）只うつぶし臥し給へり。（『源氏物語』椎本）

これは、八宮の姫君達が、父八宮の訃報に接して、涙する余裕もなく惘然自失する状を描いた『源語』の一節であるが、貞文の弔問に「返りごともせず」にいた伊勢の対応のその理由を「物もおぼえねば」とあるのは、貞文の弔問に「つれなく心を閉ざす」態に、「何ら感じるところもなかった」と言うのではなかろう。伊勢は、産み落して共に過す日も多くはなかった、その皇子の幼い不慮の死の、その悲しみの中に今、己を失なっていると言うのであろう。

それは、「滑稽な色好みとして、憫笑（びんしょう）すべき存在である平中などは全く問題にもしなかった伊勢の、御息所と呼ばれるにふさわしい或る意味では、高飛車なまでの生き方を描こうとした」ものなどでは恐らくあるまい。これは、幸せ薄くしてみまかった童姿（わらわすがた）の皇子を思うて、人の親としての「あまりに深くはげしい悲傷」の直中（ただなか）に立ち尽くす女人伊勢の像をこそ描こうとしたものなのではないか。

そこに、伊勢所生の宇多皇子の挽歌の詞章を刻みあげてゆく、それはそのまま、伊勢の前半生の終わりを絶望的に暗く閉してゆくことでもあったが、そこに『伊勢集』冒頭の物語的部分の作者の意図があった。そして、『拾遺集』では、その当然の順序として先に来ている伊勢の独詠を、その歌意については先に述べた、これはまさに嘆きの絶唱と言っていい、その独詠を後（うしろ）に順序を違えて、本段の最後に据えるそのことで、物語作者のその意図は充全に完結してゆくのである。

第十二段

（ぬべかめり・・・・・・・）（なむ）　（りける）

鳴きやみ、花ざかりも過ぎぬべしと・・のたまはせたれば・御返

（ごと）・・・・・・・・　（は）

・・・・（元の）・・・・

今は身を心憂がりて、ただ宮仕へをのみなむしける。后（きさき）の御心・

（めでたく）　（ぐひ・・・）

限りなく・・・・なまめきて、世にたとへむかたなくなむおはし

ましける。

（ほどの）　（は）（などいと）　・

この人・・曹司に・前栽・・・・をかしう植ゑてなむ住みけるを、

（の頃）・・・・・・・・（宮より）

秋・・里にまかり出でたりけるに、・・・などか、今までは参ら

（れ・・）（花の盛りもみな過ぎぬべし。）・・・

ぬ。遅く参るめれば、・・・・・・・・・・・・・・・曹司の松虫も

（り）

（三七）

り・・に聞こえさする、

（三八）

三八　松虫も鳴きやみぬなる秋の野に誰（たれ）呼ぶとてか花見にも来（こ）む。

御返し、

（三九）

三九　呼ぶとしも声は聞こえで花すすきしのびに招く袖も見ゆめり。

（させたりけり）

また、かく聞こえたてまつれる、

（に）（て）

三〇　人も着ぬ尾花が袖も招かればいとどあだなる名をや立ちなむ。

御返し、

（三〇）　（け）

三　我が招く袖とも知らで花薄色変るとぞ思ひわびつる。

【通解】

（主人伊勢は皇子を亡くしました）今は、亡が身の不遇をつくづく情なく恨めしいと思う、（その思いの中で、お后の許での）宮仕えに専念する、ただその一事を我が事としまして悲しみに堪えていたのでございました。（そうした主人に対して）お后様の御心はこの上もなく優艶で、慎ましく（労りに満ちて、）この世に喩えるものとてもない（お優しさで）ございました。

主人伊勢は、そのお部屋から見えるお庭に、美しい秋草を植えて住んでおりましたが、その秋草の咲き盛ります頃に、（一時）里下りを致しておったのでございます。（ところが、里住みの日数があまりに重なりますものですから、不審に思われたお后様から）「どうして今まで出仕なさらないの。お帰りが遅くなるようだと、（そなたのかわいがっていた）お部屋先の松虫も鳴き止み、尾花の盛りも終ってしまいましてよ」と、（帰参をお勧めの）お言葉がありました。（それで、主人は）ご返事に（次のような歌を詠んで）お届けでございました。

お前を待っているよとおっしゃって頂いた松虫も、今はもう鳴き止んでしまったそうにございますが、それなら、誰が私を呼んでくれているということで花見にお伺い致せばよろしいのでございましょうか。

（主人のこの歌に対して、お后様の）お返しのお歌は、

そなたの言うように、確かにそなたを呼ぶ声は聞こえませぬ。声は聞こえませぬが、ひそかにそなたを招く花すすきの袖は見えるようですよ。

（とございました。そのお歌に主人は）また、こんな風に詠んで差し上げたのでございます。

誰だって着ることもない、見栄えのしなくなった尾花の袖に招かれて、私がお尋ね致しましようものなら、いよいよのこと、心の定まらぬ奴と評判が立ってしまうことにならないでしようか。

（これを受けられましたお后様の再びの）お歌、

そなたを招いていたあの袖は、実はこの私がそなたを招く袖だったのですよ。それとは知らずに、そなたは、そなたがかわいがっておいでの尾花の色が衰えたと言って嘆いておいでだったのですね。

【注解】

○今は身を心憂がりて、ただ宮仕へをのみなむしける。　伊勢の境涯の転機には、いつも温子への宮仕えに専念する姿がある。温子の膝下に在って、その宮仕えに没我するその一事に賭けて、伊勢は、宿命的に己が身に及ぶ累卵の危機を乗り切ってゆこうとしているかのようである。早くは再出仕の第四段にそのことがあった。第四段のその部分を、一類本は「さてのぼりて、仕うまつりあるくに」と作る。この条の三類本の本文は「あけて内裏参り仕うまつるあひだに、」である。再びの内裏参りは寛平三年（八九一年）の秋、破局に終った仲平との恋の傷心も、年余に及ぶ大和滞在の時間の中で漸く癒えたかに見えた寛平五年（八九三年）の正月のことであった。その再出仕のことを、一類本は「仕うまつりあるく」と言う。「あるく」は「ありく」と同意で、動詞の連用形に接して「あちこち・・・する。動きまわって・・・する」「絶えずあれこれと・・・して月日を送る」と使うことば。伊勢は、仲平との苦い思い出を振り切るようにして宮仕えに専念しているのである。（第四段）

そして近くには、第九段の冒頭に、

これかれ、とかく言へど聞かで、宮仕へをのみしけるほどに、とあった。さまざまな男が、手を変え品を変え言い寄って来たけれど、伊勢はそれに一切耳を貸すことなく、温子女御への忠勤をただひたすらの我が事として専念して来たのであった。（第九段）

そのようにして越えて来た、それらの危機は、言ってみれば、彼女に備った歌才や美質などという天与の資質が招いた危機ではあった。その意味では、それらは時にあっては、晴れがましい危機感であり、自らを律するに強ければ、その危機の克服は客観的にみても可能な筈のものであった。だが、今の伊勢の上にある、その境涯の危機的なありようは、これもまた、彼女の歌才や美質がその因となっていたとは言え、それをもまた自律の意志で乗り切るには、あまりに事態は重すぎたのである。

宇多の「召人」となった伊勢の身に、皇子の誕生をその喜びとして語るかにみえた第九段を叙述した物語は、第十段の宇多譲位、更には落飾の事件記事を隔てゝ、第十一段冒頭でははやくも、その皇子の夭折のことを述べるのである。

この帝に仕うまつりて子生みたりし人は、世に幸なき者なりければ、（三類本）

と言う。それは、帝の御子を産み奉って最高の幸せ人となるべき運命を、その御子の死のために逃してしまった幸のなさを言うのではない。物語がこゝで語っているのは、前大和守という、今は散位の一受領の娘として、はかばかしい後見もないまゝに、己が意志とは係わりなく至尊の寵を受けるに至った伊勢の、「召人」としての不遇の境涯がそ

こにはあったということなのである。（第十一段）だが、その不遇の境涯も「雨の降る日、うちながめて、思ひやりたる」（第九段）侘しさであっても、皇子がこの世にある、そのことで辛うじて慰められていた。だが、

死出の山越えて来つらむほととぎす、

という、無心の鳥に向って、今は亡い恋しいあの子のことを話して欲しい（第十一段）と願うこの独詠には、至尊の寵愛も、歌人の栄光も、そのすべてを捨象していま、人の親としての悲傷の中に立ち極まった女人の伊勢がいる。

そのことを、稿者は既に、前段に於いて言葉を尽くして見届けて来たのであったが、本段冒頭の条は、それを、

今は身を心憂がりて、

という。こゝを「今は男を心憂がりて」と作る二類本は理解し難いが、三類本が「今は心憂がりて」として、心に納め切れない憂悶をそのまゝの憂悶として述べてゆくのに対して、一類本本文は「今は身を心憂がりて」と憂悶の直中にある我と我が身を確然と見定めて叙述してゆく。それは、自らの不遇を、自らの生きの命に於いて、つくづくなさけなく恨めしいと怨嗟する、そこには字義通りの精神の危機があったのである。

○后の御心、限りなくなまめきて、世にたとへむかたなくなむおはしましける。

悲傷の中に立ち極まったような伊勢に対して、大きく包みこむようにして労る温子の優しい心を概括した条である。その温子の慎ましやかな優しさはやゝ長文の次条に於いて、更には後の伊勢との贈答に於いて具体的に語られてゆくのだが、温子の、その「御心」を「限りなくなまめきて」と物語作者の評する「なまめく」という言葉は、その用例を容易に検索し難い。今『源語』でその使用例を拾ってみると、

(1) こまやかにをかしとはなけれど、（何から何まで美しいという訳ではないが）（小君は）なまめきたるさまして、あてびとと（貴人らしく）見えたり。（帚木）

(2) （紫上の父君の）兵部卿の宮は、いとあてに（上品に）なまめい給へれど、匂ひやかに（いろつやの美しさ）なども（あらぬを、（若紫）

(3) 男（源氏）は、いと尽きせぬ御さまを、うち忍び用意し給へる御けはひ、（限りなく美しい姿を、目立たぬように心遣いしてをられる様子は）いみじうなまめきて、（大層、優艶で、）見知らむ人にこそ見せめ、何のはえあるまじきわたりを、（源

氏の美しさも見せばえのしない未摘花の所だもの）あないとほしと（源氏の乳母である左衛門の乳母の娘の）命婦は思へど、

（末摘花）

(4)（葵の上は）白き御ぞに、（お産のための白装束に）色あひいと花やかにて、御髪いと長うこちたきを引き結びて打ち添へたるも、（身に添えて置いてあるのも、）かうてこそらうたげになまめきたるかた添ひて（かような有様であってこそ、愛らしく艶な風情が添うて）をかしかりけれと見ゆ。（葵）

(5) 一年の花の宴に、院（桐壷院）の御気色、内の上（朱雀院）のいと清らになまめいて、わが作れる句を誦し給ひしも思ひ出で聞え給ふ。（須磨）

(6) 人々も傍痛かれば、（女房達も源氏の手前をわるがるから）しぶしぶにゐざり出でて、（明石上は）几帳にはたかくれたるかたはらめ、いみじうなまめいて、よしありたをやぎたる（しなやかな）けはひ、みこたちといはむにも足りぬべし。（内親王達といってもよい位である。）（松風）

(7) 宮（斎宮即ち梅壷）も、かくればとにや、すこし泣き給ふけはひ、いとらうたげにて、うちみじろき給ふ程も、あさましくやはらかになまめきておはすべかんめる。（薄雲）

(8)（雲居雁を思う）心もや慰むと、立出でて紛れありき給ふ（夕霧の）さまかたちは、めでたくをかしげにて、静やかになまめい給へれば、若き女房などは、いとをかしと見奉る。

（少女）

など、これらの用例のそのすべては、いずれも心情表現語として使われたものはない。用例はすべて、人の「さま」「かたち」「気色」或は「けはひ」など視聴にとらえられたものである。その視覚的なものは「あてびとと見えたり」と言い、「あてに」「らうたげに」「清らに」「静やかに」など、上品・可憐・気品・静謐（せいひつ）と並記されている。それはみな等しく「優艶」ではあるが、「けばけばしい艶麗」というには遠い、「つやめくもの」を沈めたしっとりとした美質である。またその聴覚的なものは、「限りなく美しい姿を、目立たぬように心遣いしてをられる」と言い、「内親王達と言ってもよい位によしありたをやぎたる風情に、几帳にはた隠れている羞恥のさま」と言い、「少し泣き給ふけはひもたえがたく可憐で打ち身じろぎなさるやはら

かなけはひ」と言い、みなその身のとりなしに於いて等しなみに視覚的な場合と同じく、「優艶」ではあるが、これもまた、音を沈めてしっとりと控え目である。

この視聴にとらえられた「優艶」ではあるが、「つやめくもの」を、或は「さやぎ立つもの」を沈めて、しっとりと、控え目な美質は、さながらに「世にたとへむかたなく」てあられた温子の、労りに満ちた慎ましやかで控え目な優しさの御心のそのまゝであった。自律の意志で乗り切るには手に余る精神の危機、それは前段の叙述の具体でみれば、

いみじく悲しと思へど、甲斐なし。
死なむと思へど、死なれず。
夜昼泣きわたるに、　（三類本本文）

と語られていた伊勢の深い悲嘆を、温子はその「優しさ」で大きく包みこんでくれるのであった。

○この人、曹司に、前栽をかしう植ゑてなむ住みけるを、秋、里にまかり出でたりけるに、「などか、今までは参らぬ。遅く参るめれば、曹司の松虫も鳴きやみ、花ざかりも過ぎぬべし」とのたまはせたれば、

温子の「優しさ」が具体的に語られてゆく条である。「この人、秋、里にまかり出でたりけるに、」とある。物語の時間の進行の上でみれば、皇子の死の推定年が延喜三年（九〇三年）、その「またの年」、延喜四年（九〇四年）の夏、五月五日に詠まれた皇子追慕の独詠があって、この里下りは、その同じ年の秋のことになろうか。伊勢の局の前栽の秋草が美しく咲盛る頃に、何かの事情で一時里下りしていた伊勢の許に「はやくおいで」と出仕を促す温子の使いが来たのである。「遅く参るめれば、曹司の松虫も鳴きやみ、花ざかりも過ぎぬべし」とはいかにも優美な誘いではないか。風流な伊勢に敬意を表して、前栽の花や松虫が待っているから早く帰って来るようにと、まことにやさしく誘うのである。そこには自然の景を押し立てることによって伊勢の嘆きを労ろうとする温子の心があった、と片桐氏も秋山氏も、温子の「優しさ」を交々に述べておられる。

○四首の贈答。　この年の秋の、伊勢の里下りに、華やかだった伊勢の恋愛生活に対する非難や中傷からの逃避を見られるのは、片桐氏である。

後にある伊勢の歌から見れば、「あだなる名」が立つたゆえに、周囲の眼から逃れるために一時帰宅したのであろうが、その伊勢を、后の宮は、前栽の花や松虫が待っているから、早く帰って来るようにと、優しく誘うのである。それに対して、伊勢は、やはり七条の后のもとへ帰るのが憚られて、人を待つという名のある松虫さえも鳴き止むのは、誰も待っていないせいではないか、「秋の野」はまさしく「飽き

の野」で、飽きられている私、松虫さえも呼んでくれない所に花を見るために帰れましょうか、とすねてみせるのである。后の御返事は、「呼んでいても、周囲に気づかれぬように、こっそり呼んでいるので声は聞えない。しかし、袖で招くように、花薄がこっそりお招きしているのは見えるでしょうよ・・・・」と言っている。帰参を勧めるにも、こっそりとしなければならぬ理由があったようである。

その后の歌に対して、「誰もが着もしない、もう枯れがたの尾花の袖に招かれて行ったならば、今まで以上に浮気女という評判をとってしまうでしょうよ」と言っているのであるから、里帰りの理由は、やはり浮気女という風評に堪えられなかったということであろう。

それに対する后の御歌は、確かに「尾花」ももう終わりに近い。尾花自身も自分の袖が色変わりしているかに見えたようだが、あの袖は実は私の袖、お招きしているのは実は私なのですよと言葉をつくして帰参をすすめているのである。既に述べて来たことだが、伊勢の恋愛生活は華やかそのものである。そして、それに対する非難、中傷も当然多かったようである。しかし后の宮は優しい心でいつもそれをかばっていたという描き方がなされている。

以上が片桐氏の、こゝの伊勢と温子の四首の贈答に対するご理解である。

だが、この贈答の背景に、或は伊勢のこの秋の里下りに、彼女の恋愛事件を読むのはやや唐突に過ぎはしないだろうか。至尊の思い人としてのながめに涙する伊勢を語る第九段、譲位に続く宇多の落飾と温子の悲しみを描く第十段、伊勢所生の宇多皇子の早い死と伊勢の悲傷を語る第十一段と、三段にわたって、それら伊勢と、伊勢に係わる人々の、その暗色に閉ざされてゆく人生を語って来たここの『伊勢集』冒頭の物語的部分の文脈の上に、それはそぐわないのである。

特に、それは、次の第十三段に掲げられる『古今集』撰集のために奉った伊勢の、その歌柄にそぐわない。更にそれは、『伊勢日記』の終章となる第十四段に語られてゆく温子崩御の悲しみの事件記事にいっそうそぐわないのである。

二類本は、これを落す第十三段は、

歌召す奥に書きてまゐらす、

三(三一)山川の音にのみ聞く百敷を身をはやながら見るよしもがな。

とある一条のみである。一・三類本とも詞書、歌ともに同じのこの歌は、実は、『古今和歌集』巻第十八・雑歌下の巻末に1000番の歌として、「歌召しける時に、奉るとて、詠みて奥に書きつけて奉りける」という詞書を付けて採歌されているものである。ところが、『後撰集』で

も、同じ巻第十八、雑四の部に1291番歌として、この同じ歌が、「昔あひ知りて侍りける人の、内にさぶらひけるがもとにつかはしける」の詞書を伴って採られている。詞書が違えば、歌意も当然のこと異なって来る。

『古今集』と『後撰集』の重出歌のおおむねは、『古今集』の記述に異を唱えて『後撰集』が重出させている場合が多い、という奥村恒哉氏の言葉（『古今集・後撰集の諸問題』）を紹介されながら、片桐氏は、それはそれとして、『伊勢集』の場合は詞書からみて、『後撰集』ではなく、『古今集』の影響による形であることは否定出来ない、となれば、この歌がこの詞書を伴ってこの位置にあることのその必然性が問題になる、と、そういう問題提起をされた上で、この課題に対するいくつかの解答を示されている。

その中、最も容易な解答は混入説である。虚構の方法を使って語っている『伊勢集』の物語的部分に、このような『古今集』の詞書と非常に近い形のままの歌が収められていることは不可解であり、『伊勢集』成立後まもなく、まだ原本に近い段階において錯簡などの理由によって、後半の雑纂部分もしくは増補部分の一部にあったこの歌が、ここに紛れ込んだのではないかと考える考え方である。

次には、関根慶子氏の、この歌を、「家集的素材から物語への製作過程に於ける家集的なものの残存」と見る考え方がある。「古今集の詞書により、この歌を古今集勅撰の命の下った延喜五年に遠くない時の歌とすると、温子中宮崩御の延喜七年より前の歌であろうから、そして前と同じ里にある伊勢の歌であると解して、この冒頭物語の作者は、一応この素材を中宮崩御関係の歌より前に入れてみたが、この家集的素材を物語化して前後をつなぐ仕事が成就せずにそのまま残った」、と考える考え方である。

先の混入説はいわば物理的な考えだが、関根氏の人為的なものとする考えは、この歌が家集的素材の残存というにはあまりにも『伊勢日記』のテーマに相反するもので、たとえ「素材」であっても、このあたりの文脈には近づけがたい内容である、と片桐氏は疑義を出される。そう考えて第三に氏が提出されるお考えは、ここで視点を改めて、『古今集』では歌を召されたのだが醍醐天皇であったものを、ここでは変改して温子中宮が召されたものとしたのだという読み方である。これは早く契沖の説いたところであるが、『伊勢集』の配列に従って読む場合は、醍醐天皇ではなく、七条の后に歌を召されたと考えるべきだ、と契沖は言っているのである。そして、『古今集』をまったく離れて、契沖説のようにここを読むならば、歌の意はまったく変わって来るとして、氏は次のようにこの歌を解されている。

「『山川の音にのみ聞くももしきを』――今は遠く噂にのみ聞くだけの私にとって宮中は何の関心もない所ですが・・・・、『みをはやな

がら見るよしもがな』――わが身を昔と同じ状態にして、つまり宇多帝に寵せられ温子皇后に手あつく遇せられていたあの頃と同じ状態にして御所を拝見したいものです・・・・というわけである。冒頭から編者が意識的に作りあげて来た理想世界が、もはや過去のものになってしまったという嘆きと、それに対する飽くことのない懐旧が、この歌の主題になっているわけであって、前後と脈絡がつかぬどころか、温子皇后崩御の前、そして『伊勢集』物語的部分の閉じめ近くにあることの意味がまことによく納得出来るのである」と。

「山川の」の歌によって、『伊勢日記』の進行が断たれるという印象は否定し難いと言われた秋山氏は、『伊勢集』冒頭の物語的部分の断たれた文脈を復元してみせる片桐氏のこの解を、感服すべき見解として全面的に支持されている。ところが片桐氏は、こゝまで書いて来ながら、なお反転して、「しかし」と言われるのである。

「しかし、日常的に歌のやりとりをしている七条の后が、改まった形で伊勢から歌を召し、その際に、伊勢が深く思い入れをしてこのように詠んだという背景も分からないし、「ももしき」を「見るよしもがな」と言った理由も、相手が七条の后だと唐突に過ぎ理解し難い。

契沖の説は、彼が単なる考証学者ではなく、ずいぶんひらめきのある人物だと思わせる点においては興味深いが、やはり無理があろう。」そう言われて、最終的に氏は次のように結論されている。

即ち、現存の本文によって読んでいる限りは、この歌がこゝに置かれているのは、この時点が延喜五年（九〇五年）の『古今集』第一次成立のわずか前であり、伊勢がその最初の勅撰和歌集に多くの歌を献ずる栄に浴したことを語るためであったと考えておく。恋する女としての伊勢の前半生を描くこの物語的部分に、あえて歌人としての伊勢の名誉を表す一節を挿入してリアリティを示したという考え方である。

いわば、歌人伊勢賞揚説ともいうべきこの考え方は稿者にもよく分かる。稿者が、所謂『伊勢日記』を読んでゆく上で、常に拘り続けて来た『伊勢集』冒頭の物語的部分の時間に沿うてこれを言うならば、伊勢の上に宇多の寵の及んだ時は、寛平六年（八九四年）末から翌七年はじめにかけての頃と思われる。（第九段）とすれば、皇子の誕生は先ず寛平八年（八九六年）中のことゝなろうか。これに、二・三類本が言う皇子の薨年齢の八歳を単純計算で加えれば、その幼い死は延喜三年（九〇三年）のことゝなる。そして、その皇子を追慕する「ほととぎす」の伊勢の独詠が詠まれるのは、翌年の夏五月のことである。（第十一段）本段の秋の里下りは、その延喜四年（九〇四年）の長い夏が終ってのことゝなろうか。

延喜五年（九〇五年）撰進の『第一次古今和歌集』の撰集のために、醍醐帝が「各、家集幷古来舊歌」（「古今和歌集序」紀淑望）を求められた時を延喜の三・四年の交とみる想定は先ず動くまい。とすれば、

醍醐の詔に応じて奉り、『古今集』1000番歌として、雑歌の巻末に所収されるに至ったこの歌を、関根慶子氏も言われるように、本段の四首の贈答と同じく、延喜四年秋、里に在った伊勢の歌と解して、この冒頭物語的部分の作者はこの位置に配したものであろう。この歌に続く、次段の第十四段に描かれる宇多后温子の崩御が延喜七年のことであるから、この歌がこの位置におかれたことのその必然性はいっそうよく分かるのである。

『古今和歌集』に採歌された伊勢の歌は、二十二首、それは、集中六つの部立にわたって広く分布する。これは、業平の歌三十首が、七つの部立に分布するのに優に匹敵する。その古今歌人としての伊勢は、今やその位置を確保するに至った公的文芸としての和歌の作者として、当時の業平ら古今歌壇の男性歌人たちに伍する力と同時に、その栄光を得ていた。(拙稿『伊勢日記私注』(一)その力量と光栄とを如実に語ってゆくのが、この第十三段の三十二番歌(一類本)である。

再び、これを記せば、

歌召す奥に書きて参らす

三(三)山川の音にのみ聞く百敷を身をはやながら見るよしもがな。

「山川の」は「音」に係る枕詞。「音」は転意して「噂」の意。「百敷」は「宮居」に係る枕詞を出でて「皇居・内裏」の意。「身をはやながら」は「身を早ながら」で、「早」は、早く、即ち「以前」の意。伊勢は宇多の治世、温子に仕えて宮居を立ち馴らした身であるが、今は醍醐の世、内裏に出入りすることもかなわない。「その今の身を改めて、『以前』の晴れがましい身をそのままに」の意。「みをはや」には、初句の「山川」に関係させて、「水脈早」(水脈が早く流れる)の意をも持たせてある。

時は延喜の四年(九〇四年)、『古今和歌集』撰集のために歌を召された醍醐の帝に、昔は宇多の内裏にお仕えした私でございますが、今は華やかな宮居のことはたゞ噂に聞くばかり、願わくば以前に変らぬ晴れがましい姿をそのまゝに、今ひとたびの、宮居に伺候する身となりとうございますと申し上げている。これは、「今の醍醐天皇の代の繁栄をことほいで敬意を表している挨拶の歌だと理解される」と片桐氏は注されている。その意味では、この歌は、伊勢がその裡に蔵し続けていたに違いない歌人としての栄光の意識を存分に指嗾するものであったろう。

と同時に、若くして宮中を立ち馴らした頃を、帰らぬ夢と知りつつもなお言わずにはいられなかった、その自分ながらに禦し難い自意識を三十一文字の中に封じこめて、これは見事に観照性のかった歌柄と

なっている。勅撰和歌集に所収されるのに適しいその歌は、「今の身を改めて、以前の晴れがましい身をそのままに」と願う第四句の願いを、初句の瀬音高き山川の急湍に吸引させるその縁語的表現の手法と、事象統括の機能を果す文末助詞「がな」の駆使とによって、その観照的な歌柄を完結してゆくのである。

その歌柄と、これに直前して交される四首の贈答を、伊勢の恋と、それに対する同輩女房の非難と中傷とに係わる歌だという、そういう人の世の愛憎に棹さす主観のかった歌とみる、そのこととはそぐわないのである。

では、延喜四年と推定される、その年の秋の、伊勢の里下りの理由は何であったのであろうか。それは、推断の根拠もなく、ただ、「何かの事情で」と断るより他ないのだが、或は、「ほととぎす」の詠に今は亡い皇子を追慕してから半歳、なお、その幼い死に思い屈することがあっての暫くの里下りであったのだろうか。それにしても、滞在の時日が過ぎるのを不審に思って温子からのお呼びがかかる。消息の言葉は、「などか、今までは参らぬ。遅く参るめれば、曹司の松虫も鳴きやみ、花ざかりも過ぎぬべし」とある。その第二条のはじめの仮定表現を、三類本は「遅く参れば」と直截な表現に作っているが、これは、一類本の本文の婉曲表現に従うべきである。こゝは、「この人、曹司に、前栽をかしう植ゑてなむ住みける」という、その伊勢が丹精の庭の今の盛りに誘いのこころを譲って、自らは表に出ない温子の慎ましくも優しい、伊勢に対するとりなしを読むべきところである。

そうした温子の労りに満ちた消息に対して伊勢は、お前を待っているよとおっしゃって頂いた松虫も、今はもう鳴き止んでしまったそうにございますが、それなら、誰が私を呼んでくれているということで花見にお伺いしたらよろしいのでございましょうか、とお返しする。第二句、三類本の「鳴きやみぬなり」は、次句の「秋の野」に係って「鳴きやみぬなる」とある一類本本文に従うべきところだが、その「なる」は、小松登美氏によれば、平安時代、会話で相手の言葉に対して自分の意見を述べる時には、例えば、「いとよき事にこそあなれ」と伝聞推定の「なり」を用いることが多い。「あなたの言葉から考えると・・・・のようだ」の意で、相手を立てた言い方になるからであろう。（『和泉式部日記　全訳注』（上）講談社学術文庫・72頁）と言われる。今の場合は、「慎ましく自分の意見を述べる」というより、字義通りの「伝聞推定」に使われているのだが、結句「花見にも来む」の「来む」が、相手を主にして、その相手を立てた言い方であるのと並んで、温子を立てた言い方であることに於いて変わりはない。ここには、「七条の后のもとへ帰るのがやはり、憚られ」る、そのゆえに、「秋の野」に「飽きの野」を掛けて、「飽きられている私、松虫さえも呼んでくれない所にどうして、花を見るために帰ることが出来ましょ

うか、」とすねてみせている伊勢がいるのではあるまい。こゝにそういう抗(あらが)いをみるのなら、「曹司の松虫も鳴きやみぬべし」と温子の推量に言う消息のその言葉を、「松虫も鳴きやみぬなる」と、もはや取り返すことの出来ない既定の事実に言いなして、温子に抗ってみる伊勢がいると読むことは出来ようか。しかし、それは「すね」ではない。それは、言葉に遊ぶ「あまえ」である。

これに対して温子の歌は、

そなたの言うように、確かにそなたを呼ぶ声は聞こえませぬ。
声は聞こえませぬが、ひそかにそなたを招く花すすきの袖は見えるようですよ。

と答えて来た。同じ招くにしても、声のあらわにではない。ひそやかな揺らぎに音を沈めて招くのである。それは「帰参を勧めるにも、こっそりとしなければならぬ理由があった」からではなく、こゝでもやはり、伊勢が丹精の「花薄」のひそやかな揺らぎを、人が袖で招いている情景にみるその見立てを表に立てることで、自らはひいている優しい温子の心配りがあるのである。と同時に、無心のものをもって有情のもののこゝろを詠む、その見立ての詠法は、言葉の戯(たわむ)れとなって、伊勢の言葉に遊ぶその甘えを優しく受けとめてゆくのである。

その后の歌をうけて、伊勢は再び返す。「人も着ぬ尾花が袖も（に）招かれば（て）、」「袖も」は「袖に」の三類本がよく、「招かれて」は「招かれば」の一類本を採る。

誰だって着ることもない、見栄えのしなくなった尾花の袖に招かれて、私がお尋ね致しましようものなら、いよいよのこと、心の定まらぬ奴と評判が立ってしまうことにならないでしょうか。

これを受けた温子の歌、

そなたを招いていたあの袖は、実はこの私がそなたを招く袖だったのですよ。それとは知らずに、そなたは、そなたが丹精の花薄の色が衰えたと言って嘆いておいでだったのですね。

「人も着ぬ尾花が袖に招かればいとどあだなる名をや立ちなむ」と歌う、その「あだなる名」を「浮気女という風評」と注して、「里帰りの理由は、やはり浮気女という風評に堪えられなかったということであろう」と解してはいけないのであろう。こゝの贈答の核になっているのは、それではなく、第一首「花見」、第二首「花すすき」、第三首「尾花」、第四首「花薄」と繰り返して出て来る伊勢が丹精の「曹司にをかしう植ゑてなむ住みける前栽」の尾花（花薄）なのである。

その尾花が風になびく様を、人が袖で招いている情景にみる、温子の歌にあるその見立てを、「遅く参るめれば（花薄の）花盛りも過ぎぬべし」とあった、以前の温子の消息の言葉に返して、伊勢は「人も着ぬ尾花が袖」と言葉に遊んで抗(あらが)ってみせるのである。その抗いをうけた温子は、「あれは私の袖だったのに、そなたは、そなたのかわい

い尾花が色がさめたと嘆いておいでだったのね」と、改めておどけてみせる。その意味では、一類本結句の「思ひわびつる」は、三類本の「思ひわびける」を取るべきところである。見逃していた事実に改めて気付き驚いてゆくこゝろを叙する判断辞の「けり」、その「けり」に温子はおどけの身振りを叙して、屈し勝ちな伊勢のこゝろをおおらかに迎えてゆこうとするのである。

「あだなる」は「徒なる」で、それは「浮気な、好色な」というのではなく、「実意のない、浮わついた、己が定見を持たぬまゝにまわりの状況に流されてばかりいる」、そんな意味合いの言葉として、こゝのところは使われているのではないか。「いとどあだなる名をや立ちなむ」と言う、そのたゆたいの心を言う判断辞の「や」に今、帰参をしては、自分の考えなどちっともない人、とそんな陰口をたたかれはしないかと逡巡する伊勢、その伊勢を、その逡巡のこゝろには触れずに、あかるくおおらかに包み込んでくれる温子である。そこには先の、誘いのこゝろを伊勢が丹精の花薄に托して、自らはあらわに表には出ない優しい心配りと共に、「限りなくめでたくなまめきて、世にたぐひなく」（三類本）あられた温子の常に変わらない温容がある。

そうした温子の消息や歌にみる慎ましい優しさや、おおらかな労りに満ちた心配りに抗ってみる伊勢であったが、しかしそれは、温子に許されていると思う甘えからの、言葉に遊ぶ抗いであって、実は、こゝにあったのは、「今は身を心憂がりて、ただ宮仕へをのみなむしける」伊勢の、主人温子に対するひたすらなる傾倒であったのである。

伊勢はそのような温子の存在を支えにして、精神の重なる危機を乗り越えて来たのであった。秋山氏の言われる、伊勢にとって、その人へのいわば帰依こそが、今は生きる支えでさえあるともいうべき温子であるが、その温子との死別のときがやがて迫って来ている。『伊勢日記』の終章ともなる第十四段の語るところがそれである。（未完）

付記　本稿の成稿に当って、秋山虔氏の『伊勢』（集英社・昭和60年8月刊）及び、片桐洋一氏の『伊勢』（新典社・昭和60年8月刊）から、多くのご教示とご示唆をいただいたのは、先の『伊勢日記私注』㈠㈡㈢㈣㈤の場合と同じである。

高松短期大学研究紀要

第 19 号

平成元年1月31日　印刷

平成元年1月31日　発行

編集発行　高松短期大学
〒761-01　高松市春日町960
TEL (0878) 41－3255
FAX (0878) 41－7158

印　　刷　高東印刷株式会社
高松市東山崎町596番地